

こまざわ経済通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1-23-1

卒業おめでとう！同窓会に入会しよう！



ご卒業おめでとうございます。これまで皆さんは大学で多くの友人を得、そして講義やゼミを通して様々な人生訓を得たことと思います。先人の言葉には人生を考えるうえで、参考になるものが多いものです。そしてそれはその時々自分の進む道に通じるものです。ちょうど今、世田谷文学館では寺山修二展をやっていますが、彼は語っています。「振り向くな、振り向くな、後ろには夢はない」と。前途に希望と夢を抱いて学窓を去る皆さんに私からも紹介したい言葉です。そして、その夢を共に語り、後輩たちに夢を語る場を残していくこと、それが同窓会の役目でもあります。皆さんには同窓会に入り、共に夢を語るとともに、後輩たちを

支え、大学の発展に寄与していただきたいと願います。

経済学部同窓会会長 大場やすのぶ
(平成24年12月より東京都議会議員)

経済学部同窓会もホームカミングデーに参加

2012年11月3日、卒業生を母校に迎えるホームカミングデーが開催されました。石井清純学長や女優東ちづるさんの講演、吹奏楽部のマーチング、応援指導部ブルーペガサスが歓迎するなか、およそ1000人の卒業生が懐かしいキャンパスを訪れました。オータム・フェスティバル（大学祭）も同時に開催され、在校生、近隣住民もあわせて大学は終日、にぎやかな雰囲気でも盛りあがりました。

懇親パーティは新装となった学生食堂でおこなわれ、「商経学部・経済学部卒業生の集い」のコーナーには多数の卒業生が集まり、ビールやワインのグラスを片手にあちこちで歓談の輪がひろがりました。

例年のように経済学部同窓会もブースを設置し、「こまざわ経済通信」や経済学部研究誌『経済学論集』を配布し、好評をいただきました。会場で同窓会へ入会の手続きを取られる卒業生もいました。

ホームカミングデーは毎年11月に開催され、すべての卒業生に開かれたオープンな催しです。今年も多数の卒業生のご参加をお待ちしています。



退職にあたって

「社会思想史」の講義雑感

経済学部教授 阿部 弘

駒澤大学経済学部で教育に携わって40年になる。その中の20年以上にわたって「社会思想史」の講義で「市民と経済学」をテーマにしたものに集中してきた。

私は「社会思想史」とはなんとも不思議な縁で繋がってきた。大学の学生時代にはこの科目は、最初の2年生のときには「不可」の成績だったからである。私にとって「理論」的な世界は、外側にあった。このように書くと、なんとまあ、そのくせによくもあんな講義をしゃがったな、という声が響いてくる。実際、私にとって関心があったのは「財政学」で、しかも具体的な問題に興味があったのだった。

その私が不得意な世界に飛び込んだきっかけは、アメリカの軍事費の研究をしていて、「人を殺す」武器類が「産業」として成り立っていることに対して、素朴な疑問をもったことだった。人間が人間を殺すものを生産している！！そしてまた、他方ではこの「殺人」を商売にしている者もいる！！これはいったいなんだろうか？！「生産」とはなんだ？！このことが、私を「理論」という未知の世界にいざなったのであった。

確かに「理論」世界の研究・講義（「経済原論」、「経済理論」）をしだして、「経済学」というものが全く得体の知れないもの、という印象は無くなってきた。『資本論』も学生の時に一応読み終わったものの、再度「講義」などを通じて、自分の体の中で何か新しい姿をとってきだした。利潤のあがる場所なら何でも可である、というのが資本の本性であることが解ってきたからである。

古代の物語世界で、ある国の王が収入源の一つとして、糞尿に税金を課すという話があり、王子がそれはあんまりだと言うと、王は課税で得られたおカネを示して、くさくないだろう、臭いを嗅いでみろ、というのを思いだした。それどころではない、人を殺すことで利益を得ていて、これは他の利潤と同じだろう、という次元が現在なのである。何で、そのような考えが出てくるのだろうか？人間社会の歴史とともに考えてみよう、というのが「社会思想史」の講義になったのであった。現在、私はこの「資本」というものの本性はどういうものか、その起源から模索しているところである。

ところで、私は「講義」の評価に関しては複数回の「レポート」制をとってきた。このレポートでは巷に転がっている在り来たりのことを羅列するのではなく、レポート作成者が自分の考えで書くというのがモットーであった。

なぜ「失業」するのか、これは、これから職に就こうとする本人が考えなければ、何ら有効性はないのである。「自分自身」がレポートになって行くのであった。

40年の講義生活の中で、私が予備校時代に読んだ『蟹工船』が装いを新たに再登場したことは、その問題をレポートの課題に取りあげさせたし、レポートを書いた学生諸君は「自分」をそこに映しだしていた。

いま私自身は、自分が40年かけてきたことに新しいスポットを当てて再出発しようと意気込んでいるところである。(2013・2・10)

浅野克己先生が定年退職

昭和48年経済学部就任され、以後39年にわたり「マクロ経済学」をご担当になり、研究と教育に多大の貢献をされました。



浅野先生

姉齒先生

研究室訪問シリーズ

駒澤大学経済学部准教授 館 健太郎



平成19年度(2007年度)、経済学科フレックスBが改組されて新学科の現代応用経済学科が開設されたときに同学科所属の教員として赴任いたしました。したがって、私のゼミは開始してからまだ6年と歴史が浅いゼミです。各学年だいたい10人から15人くらいの学生が活動しています。

私はマイクロ経済学、とりわけゲーム理論と産業組織論を専攻しており、ゼミでもこの2つを中心に学習しています。ゲーム理論という分野を聞き慣れない方もいらっしゃると思いますが、これは人々の戦略的相互依存、言い換えれば駆け引きを分析することを目的とした学問です。ここでいうゲームとは、スポーツやトランプ、麻雀などはもちろんのこと、より広く

私たちの日常生活や企業の活動のなかで起きているさまざまな駆け引きも含めて総称したものです。

産業組織論は、自動車産業やサービス産業といった個別の市場での企業間の競争や協調関係を調べるための学問ですが、企業をプレイヤー、価格や投資といった企業の選択を戦略、利潤を利得と考えれば、市場での競争もゲームとみなすことができることから、ゲーム理論は産業組織論を学習するための基盤として役割を果たし、両者は密接な関わりを持っています。

そこで、私のゼミでは2年次にまずゲーム理論について集中的に学習しています。駆け引きの感覚をつかんでもらうために、たまに実際の商品を使ってオークションや競争入札の実験を行うのですが、勝負事になるとみんな大いに盛り上がります。

3年次になると、業界研究を行うためのより実践的な学習に重点を移し、4~5人ずつに分かれて、特定の業界についてグループ研究を行ってもらいます。研究成果は、学年合同で開催する8~9月のゼミ合宿や12月のゼミ発表会を通じて発表してもらっています。ゼミ合宿は富浦や九十九里浜など関東近県に出かけることが多いのですが、このような行事のときには、上級生たちが中心になって企画や運営などに活躍してもらっています。そして、4年次になると、グループ研究での経験を活かしながら、各人がテーマを決めて最終的に卒業研究に仕上げます。

ところで、私のゼミは秋に開催される経済学部・同窓会主催のソフトボール大会に毎年出場しているのですが、私自身いつも会場の活気にあふれた雰囲気を楽しんでいます。最近では2年連続3位と好成績を残していますが、ゼミ生には優勝をめざしてぜひ頑張ってもらいたいと期待しています。



卒業生シリーズ

永田 正臣先生の思い出

経済学部教授 友松 憲彦

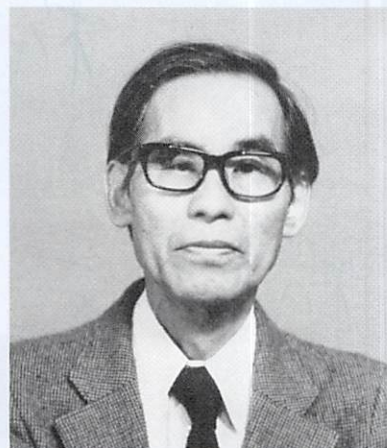
永田先生に初めてお会いしたのは、私が上智大学3年生のときでした。ゼミ(演習)を選択することになり、興味があった経済史関係では日本経済史のほかドイツ経済史とイギリス経済史のゼミがありました。私は迷うことなくイギリス経済史を選びました。それは当時の経済学や社会科学に大塚久雄氏(イギリス経済史家)の歴史学が大きな影響力をもっており、その明快な(いま思えばあまりに明快な)理論に魅了されていたからです。選択したゼミの担当者であったのは四十代の少壮学者、永田正臣非常勤講師でした。

ゼミは先生のご専門である産業革命史に関する古典的研究書を学生に割り振って報告させるスタイルでした。私は悲観派の巨匠ハモンド夫妻の分厚い皮表紙の原書を渡されました。もちろん全部ではなく、第一章を読んで論旨を報告するという課題でしたが、報告日までその本にかじりついていたことを思い出します。報告に先生がなんとと言われたか記憶がなく、きつと緊張して無我夢中だったのだと思います。といてゼミが堅苦しかったわけではありません。先生は一見すると謹厳で近寄りたがたい風貌でしたが、その表情を全く崩すことなく時に思いがけないジョークを飛ばされ、そのアンバランスにゼミが爆笑に包まれることもありました。またなかなかのダンディで、さすがイギリス経済史の先生は違うなと妙なところに感心したりしました。コンパや合宿にも同行いただき、拳句のはては御自宅まで押しかけ、非常勤の先生に対する態度としては度を越した厚かましきであったと今となっては汗顔の至りです。

もちろん駒澤大学でも学生に対する親身の教育は変わりませんでした。その名講義は有名で、学生で埋まった大教場は咳払い一つなく、水を打ったような静粛のなかで講義が進んだと聞いています。教場だけでなく、クラブ活動の新聞部顧問(論説委員の経歴がある)としても学生に慕われました。研究と教育そして一方では壮健ではないお身体で行政の激務に精励され、大学の近代化、民主化に大きな足跡を残されました。

永田先生に最後にお会いしたのはロンドンです。在外研究中だった1985年、先生も短期研修でイギリスにいられたからです。帰国の前夜、チャーリングクロス駅の近くのレストランで夕食をご馳走になり、研究状況やイギリスの大学についてお話をしました。食事後、駅までお見送りしお別れしたとき、振り返って小さく手をあげられた姿が今も目に浮かびます。それから3カ月後、先生の訃報を伝えたのは日本からの深夜の国際電話でした。

(注) 永田正臣先生は大正10年生まれ、昭和18年早稲田大学政治経済学部卒業後、産経新聞論説委員等を経て昭和24年経済学部専任講師となり、昭和60年まで36年間在職されました。この間、経済学部長(2期)、図書館長、大学院委員長を歴任されました。著書は『近世イギリス経済史』、『イギリス産業革命の研究』、『産業革命と労働者』(編著)、『明治期経済団体の研究』等、その他多数の翻訳があります。(事務局)



訃報

飯岡 透 名誉教授



飯岡 透名誉教授が平成25年2月に御逝去されました。享年81才先生は昭和7年生まれ、早稲田大学大学院を修了後、昭和41年経済学部専任講師に就任され、平成14年3月まで36年間在職され「会計監査論」、「会計学総論」等を担当されました。この間、経済学部長、大学院商学研究科委員長、経理研究所所長などを歴任され、寄付行為改訂や大学機構の改革に取り組みられ大学の近代的発展に多大の貢献をされました。ご専門の会計監査論に関する優れた業績を残されたばかりでなく、温厚誠実な教育者として多くの学生に慕われました。著書に『株式会社社会計監査論』、『財務会計概論』、『簿記概論』など多数があります。

ここに哀悼の意を表し、先生の御冥福をお祈り致します。

ゼミ紹介

長山ゼミ

私たち長山宗広ゼミナール(地域経済論)は学内の活動と学外での学び(フィールドワーク)の両立をめざし活動しています。毎年行われる夏合宿では2年生から4年生の約60名が一丸となり、実際に地方都市に足を運びそこで地域の住民や企業の方と接し、調査する中で地域を取り巻く課題を生で感じ、そこから活性化へのプランを作成し提案しています。

2012年度は銚子地域の活性化プロジェクトを行いました。5月から班ごとに統計データの分析や既存資料を集め事前調査を行いました。今回の夏合宿は初めての試みとして駒澤大学長山ゼミだけではなく、立正大学吉田ゼミ、桜美林大学大熊ゼミと3大学合同で総勢100名の大規模な合宿となりました。それぞれ「農業・漁業」「地場産業」「商店街・中心市街地」「観光サービス」「コンテンツ」「インフラ」「コミュニティ」の7つの調査班に分かれ合宿までに様々な事前準備とミーティングを重ねました。8月27日～30日の合宿当日では、事前にアポイントメントを取っていた企業や地域住民の方々、そして行政の方へのヒアリング調査を行い、最終日に行われるシンポジウムでのプレゼンテーションに向けて毎日徹夜でまとめ、銚子地域の活性化プランを練り上げました。シンポジウムでは実際に地域の方々に前にプレゼンするため、現地の方の生の声や反応を聞いたり感じたりすることができ、大変勉強になり刺激を受けました。

その後、合宿で調査した銚子での人気のお土産とシンポジウムで提案したライスバーガーを10月14日15日にJR新宿駅で行われた「TOKYO三ツ星バザール(昭和信用金庫主催)」にて販売しました。活性化プランには何と言っても持続性が重要であり、この物産展も銚子地域の活性化プロジェクトの一環として大変意義のある活動になります。さらに、9月からは銚子での学びをより深いものとするために論文の執筆を行いました。論文の執筆はさらに深い知識やオリジナリティが必要であり仕上げるまで悪戦苦闘の日々でした。しかし、11月17日18日に金沢大学で行われた、金沢大学佐無田ゼミ、龍谷大学中村剛治郎ゼミとの論文交換会に参加したことで論文執筆についての学びはもちろんのこと、自分たちの活動を見つめなおす良い機会となりました。また、同じ地域経済論を専攻している学生と交流する中で良い刺激も持ち帰ることができました。その結果、長山ゼミとして銚子地域を事例研究とする論文を12本発表することができ、そのうちの3本が「経済学部2012年度学生奨学論文」で入賞といった高い評価を得ました。

現在は、下北沢にある株式会社Life Designと情報交流拠点のビジネスプランを作成しています。このように、長山ゼミでは、実践的学びと学術的学びの両立を目標に学年の垣根を越えて切磋琢磨し活動しています。机上でも現地でも長山ゼミは常に全力疾走です！

現代応用経済学科2年 相田雄貴



ソフトボール大会

経済学部同窓会後援のソフトボール大会が開催されました。

10月15日の開校記念日に、例年通り今年も経済学部のソフトボール大会が開催されました。当日は10月とは思えないほど日差しが強く、午前から暑い中での大会開始となりました。開会式前から、すでに準備運動や練習を行っている学生の姿が数多くみられ、強い意気込みが感じられました。

試合は各エリア（試合場所）に分かれて行われました。試合が始まると、私たち参加者の意気込みに呼応するように気温が上昇し、またその暑さ以上に参加者の熱気が高まって行きました。どのチームが勝ち上がるのか全く想像できないほど見応えのある試合内容が多く、試合はどこも白熱した好ゲームとなりました。数多くの接戦の中、優秀したのは、前評判が高かった瀬戸岡ゼミ。これは昨年に引き続いての連覇となりました。準優勝は我が吉田（真）ゼミ、3位は？ゼミと？ゼミ、敢闘賞は百田ゼミでした。閉会式は、表彰状や盾の授与が行われ、どのゼミ生も最後まで気を抜くことなく、しっかりとした態度で式に参加し、大会を終了することができました。最初から最後まで、とても充実した大会だったと思いました。

この経済学部同窓会後援のソフトボール大会は、各ゼミ内メンバーの交流はもちろんのこと、各ゼミの学年を超えた交流や学部内ゼミ同士の交流を高めるとも良い機会になっています。同窓会はこのような機会を提供して下さり、単なる運営のみならず大会を盛り上げて戴いた諸先生やスタッフ学生の方々にはとても感謝しています。今後、ソフトボール大会という交流の場をきっかけに、駒澤大学経済学部が学問にスポーツに盛り上がっていくことができるよう、日々努力していきたいと思っています。

(経済学科 2年 沢田 勇)



第89回箱根駅伝・経済学部生が活躍

今年の箱根駅伝は往路9位、復路は優勝という波乱のレース展開となり結果は総合3位となり選手達にとっては不本意であったかもしれないが、関係者にとってはまず納得の結果ではないだろうか。

10人の選手の内、経済学部の学生が5人エントリーされていた。エース区間と言われている2区を窪田 忍（経3年）が非常に強い風のなかを本人にとっては思い通りの走りが出来ず残念であったと思うがまず無難に3区へ継いだ。その3区に中村匠吾（経2年）が早大のエース大迫選手に追いつかれはしたが後半に見事な競りあいをした。今後がもっとも期待できる選手であろう。5区の山登りを任された村山謙太（経2年）も本来の力を発揮できず往路は9位という結果であった。しかし、他大学は主力選手をほとんど往路に配置してきているので、復路の希望（期待）は駒澤が一番あったと思われた。

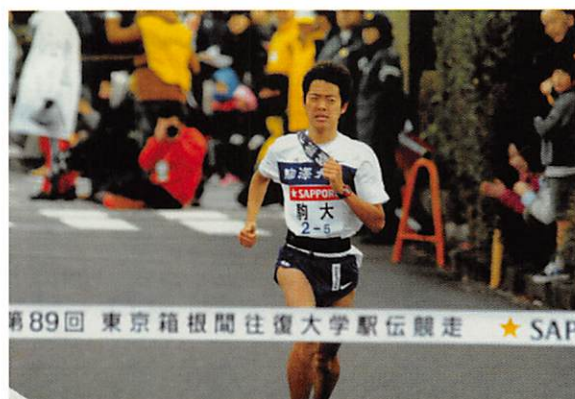
その復路の一番手6区山下りに千葉健太（経4年）が期待通り3年連続の区間賞という走りで後半の選手にはずみをつけ、9区・10区と4年生が区間賞の走りで復路の優勝を果たした。ひとつ残念なことはエースと言われた攪上宏光（経4年）が風邪でエントリーをはずされたことであった。しかし今年も経済学部の在校生のなかにも有望な選手がいるので、来年の箱根駅伝に期待したい。また次回は90回大会ということで参加校が増えるということである。



2区 窪田 忍（3年）



3区 中村 匠吾（2年）



5区 村山 謙太（2年）



6区山下り 千葉 健太（4年）

公認会計士試験に経済学部関係者が4名合格

平成24年の公認会計士試験で、本学関係者6名が見事に合格を果たしました。学部別の内訳は、経済学部関係者が4名、経営学部関係者が2名でした。例年どおり、学内では経済学部関係者の躍進が目を見せます。

経済学部関係者の4名は、1名が現役の4年生、他の3名は2012年、2010年、2008年にそれぞれ卒業されたOBの方々です。OBの方々には、本学卒業後も、難関国家試験合格を目指して努力を重ねられ、合格の栄誉を勝ち取られたことに賞賛の辞を送りたいと思います。また、4年生で合格した信田裕介さんと2012年に卒業して今回合格した小松貴行さんは、会計プロフェッショナルクラスの履修生です。世界的な景気後退の波を受け、ここ数年は公認会計士試験に合格しても監査法人に就職できないといった事態が生じていましたが、信田さんと小松さんはいずれも、日本の4大監査法人といわれる監査法人にすでに就職も決まっています。経済学部OBとして、会計士界での活躍も大いに期待されるところです。

公認会計士試験の合格率は、平成7年に6.9%であったものが平成20年に15.3%にまで上昇したのをピークに急激に下がり、平成23年には6.4%にまで落ち込みましたが、今回の平成24年試験では7.4%とわずかながら上昇に転じました。上昇に転じたとはいっても7%台ですから、依然として超難関国家試験であることには変わりありません。そうした状況の中での合格ですから、本当に価値あるものといえます。

一方、今回の税理士試験ですが、こちらも快挙でした。会計プロフェッショナルクラス履修生のみデータですが、3年生の堀江雅宏さんが簿記論と財務諸表論の2科目に同時合格、4年生の岩本洋平さんが財務諸表論に合格、同じく4年生の沼尻春菜さんが簿記論に合格しました。税理士試験も極めて難易度が高い試験ですから、現役合格は実に素晴らしいことです。公認会計士試験と税理士試験はどちらが難しいか、ということはよく聞かれることですが、あくまでも私が最近の傾向を見る限りでは、公認会計士試験は本当に努力すれば大学生が現役で合格することができる試験になってきているのに対し、税理士試験は現役のうちに5科目すべてに合格することが極めて難しい試験という印象を持っています。その意味では、現役学生の税理士試験科目合格も大変素晴らしい、賞賛に値するものです。

いずれの試験も相当に難易度の高いものですので、合格に向けての道りは決して平坦ではなく、学習能力はもちろんのこと、初志貫徹する粘り強さと己に打ち克つ精神力が要求されます。しかし合格すれば、会計界を代表する2大資格ですから、人生の活躍ステージは大きく広がります。今後もより多くの経済学部の学生が難関国家試験を突破できるよう、支援態勢の充実を図っていきます。(経済学部教授 森田佳宏)

経済学部同窓会事務局からのお知らせ

1. 新入会員をご紹介ください

同窓会の組織強化には、なによりも会員の増加が必要です。同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に未加入の方をご紹介ください。

同封の「新入会員紹介書」に記入の上、事務局にお送りください。事務局から未加入の卒業生に入会案内をお送りします。

2. 「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実をはかるため卒業生の原稿を募集しております。積極的な御投稿をお願い致します。

- ・ 論題：自由
- ・ 字数：800字以内
- ・ 送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局

*なお、原稿の採否は編集委員会にご一任ください。

3. ホームページについて

「駒澤大学経済学部」のホームページ (<http://www.komazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/>) から「経済学部同窓会」のページを見ることができます。

4. お詫びと訂正

『こまざわ経済通信』29号掲載の「駒澤大学OB矢吹会について」の執筆者名が平田次広となっておりますが、正しくは平田次弘です。深くお詫びし訂正させていただきます。

